

知らなければ、何もはじまらない

——誰も知らない日本人虐殺・福田村事件をなぜ映画化するのか

井上 淳一

ミニシアターは表現の自由の最前線

はじまりは台風19号だった。

2019年10月12日、長野県を襲った台風19号は翌13日、千曲川堤防を決壊させ、その流域に甚大な被害をもたらした。1週間後、僕は脚本の師匠である荒井晴彦さんと長野市内のミニシアター・長野ロキシーを訪れた。荒井さんの脚本・監督作品『火口のふたり』上映後にアフタートークをやるためだ。

日本のミニシアターは、シネコンでは上映されない多様な映画を上映している。インディーズの劇映画から国内外の社会派ドキュメンタリーまで実に幅広く。この国の映画における「表現の自由」はミニシアターによって担保されていると言っても過言ではない。しかし残念ながら、なかなかお客さんが入らない。映画の存在自体が周知されず、届く人にしか届かないのだ。だから、一人でも多くの人に届けるために、作り手は地方に足を運ぶ。この日もそうだった。トークが終わり、長野の友人が被災地を

見に行きませんかと言う。被災地を見ると、いう行為に躊躇いがなかった訳ではない。しかし、知らなければ何も始まらない。彼の運転する車で我々は千曲川沿いを走った。家々の壁に水がこんな高さまで来たと、いう痕が生々しく残っている。流木に廃棄物の山。鉄橋が落ちている。友人が音楽をかけた。それが中川五郎さんの「1923年福田村の虐殺」という24分にも及ぶ曲だった。

日本人が日本人を殺した

関東大震災の5日後、千葉県の福田村（現野田市）を香川からの行商団15人が訪れた。利根川の渡し船の料金で揉めた彼らは朝鮮人と疑われる。讃岐弁が怪しいと思われたのだ。東京では震災直後から「朝鮮人が井戸に毒を入れた。鋤や鎌を持って襲ってくる」というデマが権力側によって意図的に流され、検証されることのないまま報道もされ、多くの朝鮮人が虐殺されていた。その噂は福田村にも届き、自警団をはじめ村人たちは手ぐすね引いて待ち構えていたのだ。

半鐘が鳴らされ、隣村も含む、100人とも200人とも言われる村人たちが駆け付けた。行商団は「ジュウゴエンゴジュツセン」と何度も言わされ、歴代の天皇の名前を暗唱させられ、「君が代」を歌わされた。しかし、興奮した村人の疑いは晴れず、巡查が本署の指示を確認するためにその場を離れた瞬間、暴発した。鋤や鎌で日本人に襲いかかったのは日本人だった。逃げる男たちの頭を鳶口でかち割り、赤ん坊を抱いて命乞いをする母親を竹槍で突き刺した。川を泳いで逃げようとした者たちは小舟で追われ、日本刀でめつた斬りにされた。その数9人。中には幼い子どもも臨月の妊婦もいた（だから殺されたのはお腹の子どもを含め10人だとする人もいる）。しかし、事件後、逮捕されたのはたったの8人。それも昭和天皇即位の恩赦ですぐに釈放になる。行商団は香川の被差別部落の出身だった。故郷の村に仕事はなく、耕す田畑もなく、遠く千葉まで行商に来ていたのだ。そして、生き残った6人もまた沈黙した。

中川さんがその事件を切々と歌い上げる。荒井さんも僕もシヨックを受けていた。事件そのものにもだが、自分たちがこの事件を知らなかったことに対してシヨックを受けていたのだ。二人とも関東大震災の朝鮮人虐殺に関しては何れもに勉強してきた

つもりでいた。実際にシナリオにも書いていた。

黒歴史を描かない日本映画

それは『白磁の人』といって、植民地下の朝鮮で民族服を着て朝鮮語を話し、李朝白磁の価値を見いだしたとされる浅川巧という実在の人物を描いた映画だった。神山征二郎監督で、脚本は荒井さんと僕。「植民地下の朝鮮でこんな面白いことをした日本人がいましたというだけの話じゃダメだ、悪いことも描かない」と関東大震災の朝鮮人虐殺を書いた。原作にも虐殺を聞いて、浅川が泣き崩れるという描写があった。我々はそれを浅川の想像という形で具



関東大震災当時、村々に自警団が結成された

体的に描いた。それがスポンサーの逆鱗に触れた。スポンサーは「こんなにすごい日本人がいた」をやりたいかったのだ。結局、脚本も監督も替えられ、映画は作られなかった。13年前のことだ。

そんな我々が福田村事件のことを知らなかった。もちろん、中国人や日本人が朝鮮人と間違えられて殺されたという事実は知っていた。なのに、具体的なことを知らなかったのだ。帰りの新幹線で、荒井さんがポツリ言った。

「これ、映画にしよう。知った以上、何かやらないと」

しかし、僕は躊躇った。『白磁の人』はたった1シーンのために降ろされた。いや、今作られている日本映画を見て欲しい。毒にも薬にもならない映画が溢れ、社会を正面から描き、世の中を撃つ映画はほとんどない。映画に限らず、この国ではなぜか表現が政治性を持つことがタブーで、過去の黒歴史とも向き合わない。いや、インディーズにはかろうじてある。自分たちで集められる範囲の低予算で作る分には何をやっても構わない。実際、そうやってお金を集めて、アジアでの加害行為や天皇の戦争責任も描いてきたし(『戦争と一人の女』、原発(天地を受け継ぐ))も改憲(誰がために憲法はある)

もやってきた。しかし、今回ばかりは事情が違う。時は大正。行商の道中があり、関東大震災があり、虐殺シーンでは大勢のエキストラが必要だ。お金がどれだけあっても足りない。そして、そんなお金を出すスポンサーなんて、いるはずがない。福田村事件は朝鮮人虐殺と被差別部落という、この国が描いてこなかった「危険な要素」がふたつもある。しかも、荒井さんは「監督はお前がやれ。お前もこの辺でちゃんと勝負して代表作撮らないと」などと言っている。僕が監督で何億円も集まる訳がない。

知った以上、何かやらないと

悩んだ。真剣に悩んだ。我々が知らなかったのだ。多くの人も知らないに決まっている。我々が作らなかつたら、こんなこと映画にしようなんて人が他に出てくるはずがない。荒井さんの言う通りだ。知った以上、何かやらないと。我々のように伝える手段を持っている人間は特に。荒井さんにやると返事したのは3日後だった。

当然、脚本は自分たちで書くものだと思っていたら、佐伯俊道さんに頼もうと荒井さんが言う。佐伯さんは荒井さんとは学生運動時代からの仲間で、共作もしている。また佐伯さんはテレビを主戦場にしていて、沖縄戦を舞台にした『白旗の少女』

や『実録・小野田少尉 遅すぎた帰還』など硬派な社会派実録ドラマを何本も書いている。たぶん佐伯さんが書いた方がより多くの人に受け入れられやすいものになるという判断なのだろう。こうして、荒井さんがプロデューサー、脚本が佐伯さん、監督が僕という座組で企画が動き出した。

年が明けて、2020年1月。荒井、佐伯、井上の3人は事件の現場である福田村を訪れた。昔の脚本家は「時代劇を書くなら、城跡でいいから行け」と言ったらしい。まずは現場だ。しかし、問題があった。福田村事件には極端に資料が少ないのだ。いや、ないに等しい。被害者が沈黙したというのもあったろう。加害者側の福田村史にも野田市史にもほとんどその記述はない。唯一、辻野弥生さんという地元の作家が「福田村事件」という本を出しているが、その辻野さんにしても分からないことが多いらしい。この日も辻野さんの案内で関係各所を見て回った。

森達也第一回劇映画監督作品

2月、『火口のふたり』でキネマ旬報日本映画ベストワンに輝いた荒井さんの授賞式があった。翌日、荒井さんから電話があった。キネマ旬報のベストテンは劇映画と文化映画に別れているのだが、文化映画のベ

ストワンが森達也さんの『i-新聞記者ドキュメント』で、授賞式の控室で初対面の森さんに福田村事件を映画化すると話したら、森さんが「僕も劇映画の監督第一作として福田村事件をやるうと思ってる」と言ったという。荒井さんが森さんに進行中の企画を話したのには理由がある。我々が長野で聞いた歌は、森さんが福田村事件のことを書いた文章に中川五郎さんがインスパイアされて作ったものだったのだ。この時点で、森さんも我々も一円たりとも製作費の目途はついていない。しかし、僕は思った。僕が監督ではなく、森達也劇映画第一回監督作品ならば、お金が集まるのではないかと。しかも、森達也監督の方がより多くの人に福田村事件が届くのではないかと。我々は中川さんの歌を聴いて事件を知った。中川さんは森さんの文章を読んで知った。そういう意味では、森さんが大本なのだ。森さんこそ監督に相応しいのではないか。それに何より、僕が森達也監督で福田村事件を見てみたい。僕は森さんに監督を譲ることに決めた。

3月、森、荒井、佐伯、井上、そして我々の製作母体となるはずであった大秦株式会社の社長・小林三四郎の5人で会うことになった。場所は中川五郎さんのライブ会場。僕が出した条件はただひとつ。我々は福田

村にも行き、佐伯さんはすでに資料を読み漁っている。だから、この座組をそのまま受け入れてもらえないかというものだった。森さんは快諾してくれた。こうして、森監督、佐伯脚本、僕がプロデューサーに回り、荒井&井上がプロデューサー、小林製作という、新たな座組で福田村事件の映画が再スタートした。目指すは、福田村事件から100年、関東大震災から100年の2023年。一〇〇周年（いいことじゃないのに「周年」でいいのか）にあわせて公開する以外、膨大になるであろう製作費を回収する道はない。

殺す側も殺される側も我々と同じ普通の人間

そこから脚本作りも資金集めも一気に動き出した、と書きたいところだが、現実はいかなかうまくいかない。脚本作りも難航、資金集めもままならない。そりゃそうだ、こんな危険な香りのする映画にお金を出さうという物好きんな人なんて、そうそういるはずがない。そんな人がいるなら、日本映画はここまでは悪くなっている。よく韓国映画から何周回遅れみたいなことを言うけれど、もう走っているトラックが違おうとしか言いようがない。喩えて言うなら、オリンピックと町内運動会みたいな。韓国のみならず、世界のどの国でも、自国の黒歴史

史と向き合った映画が数多く作られている。それに引き替え、この国は——。よく森さんと話すのだが、福田村事件だって、ハリウッドならすでに何回も映画化されているに決まっている。もう情けないを通り越して、悲しくなる。製作費を少しでも補うため、年明けにはクラウドファンディングを始めるので、その時はよろしくお願いします。

話を戻す。当初からこの事件を特別なものとして描いてはいけなさと話し合ってきた。福田村事件や朝鮮人虐殺に限らず、他のジェノサイドでも戦争でもそうだが、殺す側も殺される側も我々となんら変わる点のない普通の人間なのだ。誰もが誰かの父であり母であり、夫であり妻であり、子であり孫であり、誰かを愛したり愛されたり、傷つけたり傷つけられたり、晩ご飯は何食べようと考えたり、そんな人たちが何かのきっかけで殺す側と殺される側になってしまう。その事実だけは忘れてはいけない。この福田村事件だって、殺された9人は数じゃない。一人一人に顔があり、一人一人の生がある。これは加害者にとっても同じこと。竹槍や鳶口で妊婦や幼子を殺した人にも顔があり生がある。それは南京で虐殺された人もアウシュビッツで処刑された人も広島や長崎で原爆死した人もミャンマーやシリアやベラルーシやエチオピアで

殺された人も同じ。その普通さ、我々との変わらなさを描くことで、福田村事件が過去の特別な事件ではなく、今、我々が立っているこの地平と地続きの問題だと伝えたい。ヘイトスピーチや分断を例に出すまでもなく、コロナ禍で何が起こったかや思い出せばいい。自粛警察、他県ナンバー狩り、感染者や病院関係者への差別。我々は100年前となんら変わることのない世の中をなんら変わることのないメンタリテイで生きている。

しかし、これをシナリオに落とし込むのは至難の業だ。大抵の映画はラストに向かって、ひとつひとつ登場人物の行動を積み上げていく。だから、地震が起こるまで普通に生きている人たちが殺す側と殺される側に別れるというのは、非常に難しい。普通の中に何を見つけたのか。ただ1年以上、この問題と向き合ってきて、シナリオも随分と形になってきた。撮影は実際に事件のあった来年の9月6日前後に行なわれる。時間はあるようでない。政治を語らないこの国の役者たち。キャストイングも苦労するだろう。お金だつて集まった額でやるしかない。

映画を武器に世界と闘う

それでも、この映画は作られなければな

らないと思う。小池百合子東京都知事は、石原慎太郎でさえ出していた関東大震災の朝鮮人慰霊祭への追悼文送付を就任以来5年連続でやめている。4月には「従軍慰安婦」より「慰安婦」が適切と閣議決定され、それが教科書検定にも反映している。この10年、何度も底が抜けたと思ってきたが、底なし沼の底はなお暗く深い。

もう一度、言う。だからこそ、この映画は作られねばならない。しかし、それは資金面だけでなく、我々の力だけでできるものではない。冒頭に我々が作る規模の映画は届く人にしか届かないと書いた。この映画を一人でも多くの人に届け、一人でも多くの人に「1923年福田村の虐殺」を知ってもらうには、これを読んでいる皆さん一人一人の力が必要だ。知らなければ、何も始まらない。まずは知ってもらうこと。そして声を上げること。

僕は若松孝二監督のもとで映画を学んだ。若松さんいつもこう言っていた。

「映画を武器に世界と闘う」

しかし、一人では闘えない。
応援、よろしくお願いします。

(いのうえ・じゅんいち／脚本家、映画監督)